10　次の文章を読んで後の問いに答えよ。　　　〈金沢大〉二〇一九年度出題

　兼好法師、秋の頃思ひ立ちて、二たび東に下りりしに、鳴海潟を過ぎ行き侍るほど、Ａわれにひとしき世捨て人の、の葉を打ちかたぶけ、先立ちて行くを、「いかなる人なりけむ、道のほども語らばや」と思ひて、追ひつきてみれば、見し人のやうなり。互ひに面がはりやしぬらむ、しばしよくよく見れば、そのかみ、いづちともなく失せひしのなりけり。大徳も「兼好の法師にこそ。いかに」とて、ともに笠を脱ぎて休らふより、かしこのに立ち寄りて、こしかたを語りあはするに、大徳、「自らはやうに心ざしありしを、君あながちに召しまつはさせ給へるままに、しばしと、Ｂにもあらで過ごしけるほどに、おのづから折々のひ目に捨てはつべき世を思ひ知りて、かくはなりぬるにこそ。Ｃ今はなかなか何事も心にまかせぬれば、住まひをも定めず、身をやすく行きめぐりて、仏にも心ざしを運びぬるになむ」と語られければ、兼好、「自らも故院の上の隠れさせ給ひし時より、身を用なきものと思ひなりて侍れば、のがれもはつべく心ざし侍りながら、Ｄ年ごろ、とかくヘられしかど、つひにかくはなりにて侍り。まことに、のがれつる身はひとしくこそ侍りけれ。さて、今も東の方にさぞらひ行き侍るになむ」とて、互ひに後の世の道など聞こえてほどをふるに、短き秋の日のはやかたぶきければ、つきぬ名残を思ひ捨てて、又めぐりあふべき事をちぎりて、泣く泣く別れ行きけり。兼好はそれより東に行きて、ほどなく都に帰り侍りぬ。

（『兼好諸国物語』巻五第三十二条による）

（注）

○大徳─僧の称。

○菩提─悟りの境地。

○君─天皇。

○さぞらひ─「さすらひ」に同じ。

問１　傍線部Ａ「われにひとしき世捨て人」とは、だれのことか、「世捨て人」となる前の名前で答えよ。

◎問２　傍線部Ｂ「にもあらで過ごしける」とは、どういう「過ごし」方であったというのか、またその原因は何であるというのか、簡潔に説明せよ。

問３　傍線部Ｃ「今はなかなか何事も心にまかせぬれば」とは、どのようなことができているというのか、四〇字以内で説明せよ。

問４　傍線部Ｄ「年ごろ、とかくへられしかど、つひにかくはなりにて侍り」を、「かく」の指すことを明示して、現代語訳せよ。

【解答と採点基準】

問１　万里小路藤房

問２　Ａ天皇が無理やりに、常に身近に付き添わせようとなさったため、Ｂ出家できずに俗世に留まるという過ごし方。

Ａ＝５〔「身近に付き添わせるようにさせた」の内容があること。「天皇」がなければ減点２。「無理やり」の内容がなければ減点２。〕

Ｂ＝５〔「出家できず」の内容があること。〕

問３　Ａ出家遁世して、住まいを定めず、Ｂ仏道修行のため、気楽にＣ諸国を巡る旅ができている。（39字）

Ａ＝３〔「出家する」「世捨て人になる」なども可。〕

Ｂ＝４〔「仏道を究める」なども可。〕

Ｃ＝３〔「諸国」はなくてもよい。〕

問４　Ａ長年、いろいろと妨げられたけれど、とうとうこのようにＢ出家の身となりました

Ａ＝５〔「妨げられる」という内容があること。「長年」の内容がなければ減点１。〕

Ｂ＝５〔「出家の身」は「世を捨てる」「仏道に励む」なども可。〕

【現代語訳】

　兼好法師が、秋の頃思い立って、ふたたび東国に下りました時に、鳴海潟を通り過ぎます時、自分と同じ世捨て人で、蓮の葉笠をかるく傾け、（自分の）前を歩いて行く人を、「どういう人であったのだろう、仏道のことも語り（合い）たいものだ」と思って、追いついてみると、知った人のようである。互いに顔かたちが変わってしまっているのだろう、少しの間よくよく見ると、以前、どこへともなく消え去りなさった万里小路藤房の大徳であった。大徳も「兼好の法師で（はありませんか）。なぜ（このような場所にいらっしゃるのか）」と言って、ともに笠を脱いで立ち止まると、離れたところにある小さなお堂に立ち寄って、これまでのことを親しく話し合う時に、大徳は、「自分は早くから悟りの境地（を求めようと）の志があったのに、天皇が無理やりに常に身近に付き添わせようとなさったため、少しの間（は出家せずに俗世に留まろう）と、本来の意志でもなく（俗世で）過ごした間に、自然と時々の不本意なことに、すっかり捨ててしまいたいこの世（であること）を思い知って、このように（出家の身と）なってしまった。今はむしろ何事も心のままになってしまったので、住まいをも定めず、気楽に（諸国を）旅して歩いて、仏の道にも心をむけたのだ」とお話しになったので、兼好も、「自分も故院がお亡くなりになった時から、（我が）身を必要の無いものと思うようになりまして、すっかり（俗世から）逃れたい（という）志がありますのに、問４長年、いろいろと妨げられたけれど、とうとうこのように（出家の身と）なりました。本当に、（俗世を）逃れた身は（あなたも私も）同じであることですね。そして、今も東国の方へさまよい歩いて行く（ところな）のです」と言って、互いに来世への道などを申し上げて時がたつうちに、短い秋の日が早くも傾いたので、尽きない名残の思いを捨てて、きっともう一度めぐりあうであろう事を約束して、泣く泣く別れて行った。兼好はそこから東国に行って、間もなく都に帰りました。